最優秀賞
文部科学大臣奨励賞

「僕の朝」

山形県東根市立第一中学校
二年　青山周平



耳元で、電子音が鳴り響く。目覚めの時を知らせる時計を止めて、僕は窓を開ける。

「やっぱり、暗いんだよな。」

三月とはいったものの風は冷たく、僕は少し身ぶるいした。目をこらして外の風景を確かめる。祖父の残していったさくらんぼ畑はいつものまま、何の変わりもない。

時刻は午前四時。僕にとっては特別な早起きだった。祖父の見た朝を、僕も見てみたかった。祖父の居た場所に、僕も居たかった。

祖父は、僕が小学校を卒業した一週間後、突然倒れて、そのまま亡くなってしまった。別れの言葉もなく、急にいなくなってしまったので、僕は悲しくて仕方がなかった。一周忌が過ぎた頃、両親から一つの提案があった。祖父の使っていた部屋を、僕の部屋にしたらどうかという話だった。僕は喜んで机を運んだ。

部屋は六畳ほどの和室で、すっかり片付けられていた。祖父のものは何ひとつ残されていない。窓から見えるさくらんぼ畑が唯一の祖父の形見のようだった。僕のものを部屋に入れると、祖父のおもかげが全て消えてしまったかのようで、少し気後れがした。すると父が僕にプレゼントがある、と言った。

「この時計、周平が使うといいよ。」

手渡されたのは使い古された目覚まし時計だった。何度も押されたストップボタンは塗装の色がなくなり、黒くなっていた。一目で祖父の使っていたものだとわかった。

「これ見るとさ、じいちゃんがいつも何時に起きてたのか、わかるよな。」

父が言うので確かめてみると、設定時刻は午前四時。祖父は毎日、この時刻に起きて畑仕事に出かけていたのだ。

目覚まし時計を手にした僕は、しばらくの間、祖父のことを考えていた。生前の祖父は本当によく働く人だった。農業が好きで、果樹や米をたった一人で育てていた。いつも作業服を着ていて、手はまるで岩のように、ごつごつしていて、顔は日焼けしている。まさに農夫という言葉が、ぴたりと当てはまる人だった。孫の僕としては、もう少しきれいな服を着ていてほしいとか、遊びに連れていってほしいとか思ったりもしたが、今はそうは思わない。

母がよく言う。

「じいちゃんは明日地球が終わると知っていても、今日、さくらんぼの苗を植えているような人だったんだからね。」

農業一筋にたくましく生きた祖父を、僕は今、誇りに思う。祖父の残したものは形がなくても、家族の間にしっかりと刻まれている。そう思いながら、もう一度部屋の中を見渡すと、この場所は祖父の思い出で埋めつくされている。柱の傷も、壁の汚れも、祖父の生きた証だ。僕は祖父との思い出に混じって、同じ場所で、同じ空間を見つめているのだ。

「よし、じいちゃんの目覚ましで、明日は早起きしてみよう。」

家族に内緒で、僕は祖父に約束した。

午前四時の家の中は静まり返っている。この静けさを破らないように、祖父はそっと家を出て、畑に向かっていたのだろう。春まだ浅いこのとき、さくらんぼの木はしかし確かに、芽ぶいている。二十年近く、大切に育まれた木々たちは、主がいなくなっても花を咲かせ、実を成らせようとしている。

「負けられないな。」

祖父の愛情を受け継ぐ者として、大地に根を張り、たくましく生きる畑の木々たちに、僕は自分自身を重ねた。そして、おそらく祖父もそうしただろうと思い、ひとつ深呼吸してみた。

祖父の部屋に移って半年が過ぎた。目覚まし時計は今、六時にセットされている。僕の朝は、午前六時に始まる。窓を開けると、空はもうすっかり明るくなっている。

祖父の見た朝から二時間遅れの朝。家の中も何やら騒がしい。さくらんぼは緑の葉におおわれ、すがすがしい。

「おはよう。」

僕の声は、祖父に届いているだろうか。